
偽月

皇 白夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偽月

【Nコード】

N2941A

【作者名】

皇 白夜

【あらすじ】

遙か昔、人類は月に移住した。月面基地という無機質な閉鎖空間で育った主人公・要。側には玲音という大切な友人がいて、日々の生活にもそれなりに退屈はしなかった。そんなある日、幼馴染みである桔梗が治療法の見付からない目の病に感染してしまい…。

序章

遙か昔、人類は月に移住した。

地球の空気は過度の有害な化学物質によって汚染され、呼吸を補助する機械無しでは生きられない程だった。

環境の整備が不十分だった地域の人類は死に耐え、その数は地球全体を合計しても僅か一万人にまで減少してしまった。

いつだって、人間は同じ人間の発明した高度な文明に頼って生きて来た。

しかし、生活を楽しむつもりが逆に自分達の首を絞める事になるとは誰一人として考えなかったらしい。

豊かな生活の副産物として、人間は生命の源である地球から撤退せざるを得なくなってしまったのだ。

幸い、転送技術が発達していた事で食糧や生活用品の確保には困らなかった。

もはや、住む必要の無くなった地球に物体を残す意味など無い。

まだ、人類には地球の衛星である『月』という居住空間が残されていた。

人類は、生活に必要なと思われる物を見境無く全て月面基地に転送した。

当然、地球は廃墟の様に寂れた静寂が支配する死の星になってしまった。

「海を転送しよう」

人類の誰かが言い放った。

結果、転送技術を最大限に活用して海を月面に転送させる事になった。

理由は、生物が生きて行く為に必要不可欠な生活用水の確保。

汚染されていない海が月面に転送され、もはや地球からは唯一の象徴である海の青すらも消えてしまった。

地球は、人類自らの手で何者も住む事の出来ない死の星へと変貌したのである。

最後に、一万人の人類も一人残らず月面に建設されている基地に転送された。

これが、今から百五十年前の話。

【歴史資料・地球の過去から一部引用】

序章（後書き）

ブログです。大体の世界観を説明する為に書いたのですが…何と無くあらずじと対して変わらない様な気がしています。今回の舞台はアレなんですが、ジャンルは間違い無くファンタジーだと思います。一応、一日置きを目安に更新して行きたいと思うので、一人でも多くの方々に楽しんで頂けたなら携帯物書きとして幸いです。稚拙な部分が目立つ所ですが、どうか最後までお付き合い下さいませ。

第一月

「へえ……」

人のいない静かな図書館で、俺は今までに無い読後感に浸りながら読んでいた本を閉じて元の本棚に戻した。

地球の歴史は、どうやら百五十年も前に呆気無く終っていたらしい。だから、こんな月面基地なんて偏屈な居住空間に一人もの人間が住んでいるのだ。

外に出た事は無いが、大人の話によると基地はさながらドームの様な作りらしい。

何しろ、この基地だけで生きる為に必要な食糧から娯楽の為に使う雑貨まで全てが抜け目無く揃ってしまうのだ。

つまり、人類は月面へ出る機会を自ら封印してしまったと言えるだろう。

だが、俺はというと外に広がる月面の景色が気になって仕方無かった。

十七年の間、常に無機質かつ巨大な鉄の壁を見ながら育って来たのだ。

俺以外にも、外の景色が気になっている奴は沢山いるんじゃないかと思う。

「要^{かなめ}ここにいたの」

図書館の中を詮索していると、突然後ろから名前を呼ばれ右肩に手を置かれた。

「桔梗^{きぎよう}か。どうした？」

もう、後ろを振り向かなくても彼女の名前を忘れる筈は無い。

肩まで伸ばされた長い茶髪に、特徴的な蒼色の瞳を持つ昔からの幼馴染みだ。

「要、また私なんかの為に無理してるんじゃないかと思って……」
だが、桔梗は決して逃れる事の出来ない過酷な運命を抱えていた。

「ばか。約束しただろ？」

そう言いながら、桔梗の左目を覆い隠している小型の機械を静かに外す。

「少しでも早く、この義眼を卒業して普通の視力を取り戻させてやるって」

そう、桔梗の左目は原因不明の病で徐々に光を失っているのだ。

今は義眼を装着しているが、これは眼鏡の様に入って来る光を屈折させて映像に変換するという簡単な代物である。

言わば応急処置の様な物だが、左目の移植をしなければ、いずれは失明する。

それがもし右目に転移してしまえば、二度と桔梗の瞳に光が差し込む事は無い。

「だけど、そのうち臓器提供者が見付かるかもしれないから……」

桔梗は、まるで別れでも告げるかの様に哀しい表情を浮かべていた。

「要には無理して欲しく無いの」

「桔梗……」

だが、厄介な事にこの病気に蝕まれた者に普通の移植手術は通用しない。

無理に移植しても、型が合わなければまるで白血病の様に死ぬ可能性を伴った激しい拒絶反応を起こしてしまうのだ。

桔梗に合う目の持ち主は、病気が確実に進行しているにも関わらず未だに一人も見付かっていなかった。

「……桔梗、俺はお前を助けたいっていう俺の意思で行動してるんだ」

なだめる様に言い、外していた義眼をそつと桔梗の左目に装着してやる。

「俺は、自分の幸せの上に、お前の不幸を乗せるなんて事はしたくない」

と、不意に俺のポケットに入っている通信機から覚えのある声が聞こえた。

『玲音^{レオ}だ。要、応答願う』

それは、俺の友人であり桔梗の病気についての情報収集を手伝ってくれている玲音からの連絡であった。

「玲音さんから連絡？」

「ああ」

素早く通信機をポケットから取り出し、ONと書かれたスイッチを押す。

『要！大変だ！！』

「何だよ、そんなに慌てて」

いつもは冷静な玲音が、この時ばかりは何故か声を荒げて取り乱していた。

そして、次の瞬間通信機を通して玲音から発せられた言葉は驚愕の台詞だった。

『じ……実はな、桔梗さんの病気を直してやれるかもしれないんだ』

それは、手元の通信機に表示された印から計算して恐らく同じエリア内にある別の図書館からの発信だ。

「分かった」

それだけ言つと、俺はゆつくりと通信を切断してポケットへ通信機を戻した。

「桔梗、行こう」

「えっ？」

不安そうにする桔梗の手を引き、俺はすぐ側にある移動用の転送装置に入り玲音の待つ図書館へ目標を設定した。

「これだ、要」

玲音は、多少乱れた銀髪を整えながら目の前の机へ無造作に何かを置く。

そこに広げられたのは、人間の身近に群生している様々な種類の植物が書かれた分厚い図鑑だった。

そして、そのページには月面に群生している唯一の植物という記事

があつた。

「月生花……？」
げっせいか

玲音の指差す先には、月に群生している植物として『月生花』という名前の白い花の絵が描かれていた。

「まさか、この月面に植物が生えていたなんてな……驚いたよ」

「ああ、確かに……」

玲音の発見は、俺達の持つている考えを根底から覆す結果となった。そう、今まで月面という場所は高度な化学技術を持つ人間ぐらしか住めない場所だと思い込んでいたからだ。

「月生花。その絶大な治癒効果の為、乱獲が進み絶滅の危機に貧している」

と、それまで黙っていた桔梗が俺達の代わりに細かい説明を朗読する。

簡潔に、それでいてどこか希望に溢れている様な短い説明の文章だった。

もしや、この花が見付ければ桔梗の病気を直してやる事が出来るかもしれない。

俺の精神は、たった一つの希望に向かって行動を始めようとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2941a/>

偽月

2010年10月10日00時03分発行